

キャラクター名 シェリル・レッド	プレイヤー名
---------------------	--------

メインクラス	シーフ	Lv.1:		レベル	10
サポートクラス	サムライ	Lv.1:	ガンスリンガー	性別	女性
称号クラス				年齢	14
種族	ヒューリン			境遇	紛失
出自 (効果)	学者			目標	復讐

	筋力	器用	敏捷	知力	感知	精神	幸運
基本値	9	22	15	9	18	9	9
ボーナス	3	7	5	3	6	3	3
クラス修正	1	2	1	0	1	1	0
他修正							
能力値	4	9	6	3	7	4	3

HP	87
MP	76
フェイト	5

装備品		射程	命中	攻撃	回避	物防	魔防	行動	移動
右手	キャリバー	10m	0	5	0	0	0	0	0
左手									
頭部	ハット					1			
胴部	レザージャケット					4			-1
補助	ガントレット					3			-1
装身具	手入れ道具								
能力値			9	0	6	0	4	13	9
スキル				3					
その他				1					
総計(右)			9	9					
総計(左)			9	4	6	8	4	13	7
総計(両)									m
ダイス数			2 d	2 d	2 d				

	能力値	スキル	その他	合計	ダイス数
トラップ探知	7			7	+ 2 d
トラップ解除	9			9	+ 2 d
危険感知	7			7	+ 2 d
エネミー識別	3			3	+ 2 d
アイテム鑑定	3			3	+ 2 d
魔術判定	3			3	+ 2 d
呪歌判定					+ d
錬金術判定					+ d

所持品	
MP	
MP	
HP	
冒険者セット	

現在重量:	8	所持金:	10	預金・借金:	
最大重量:	9				

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
オールラウンド	★	-	パッシヴ	-	自身	-		
効果: キャラ作成時に任意の3つの能力基本値+1								
ワイドアタック	1	4	メジャー	武器	範囲(選択)	命中		
効果: 武器攻撃を行う。命中判定の達成値に+SL								
インタラプト	★			効果参照			SR1	
効果: このスキルは無かった!								
バタフライダンス	★		P					
効果:								
	○							
効果:								
キャリバー	★		AT					
効果: キャリバー取得								
ロングバレル	1		AT					
効果: あなたの所持している「種別:魔導銃」の武器の「命中修正」に+1,「攻撃力」に+2,「行動修正」に-2する。								
	○							
効果:								
サイティングデバイス	1		AT					
効果: あなたの所持している「種別:魔導銃」の武器の「命中修正」に+2,「行動修正」に-1する。								
プレッシャー	1	6	m	武器	武器	武器		
効果:武器攻撃を行う。そのメインプロセスで行う武器攻撃のダメージに+[SL×3]。対象のHPに1以上ダメ与えた場合、対象に[威圧]を与える。								
アイデンティファイ	1							
効果: アイテム鑑定+1d								
リムーブトラップ	1							
効果: 罠解除+1d								
サーチリスク	1							
効果: 危険感知判定+1d								
	1							
効果:								
	1							
効果:								

誕生日:11月12日 年齢:14歳 身長:157cm 体重:40kg 血液型:B型 出身地:北・ギスレム 瞳の色:レッドブラウン

貧民街「ギスレム」の生まれ。  
 盗唯一の肉親である父親を街を襲った「大虐殺」で失ってから、荒廃したギスレムで一人で生きてきた。心はすっかり閉ざされ、銃のみを信じて生きてきたが、PC1【みったんのキャラ】と出会ってから徐々に心を開いていく(いわゆるツンデレ)。  
 男勝りな性格で、スラム育ちで、自立心の強い性格ゆえ他人の我儘に対しては手厳しく、他の仲間達に対しても容赦無い。

今から7年前に自分の村を襲った魔族の大虐殺によって父親が自分の目の前で殺される。あふれ出る鮮血に自分の前で父親の生き血を吸う魔族の姿。そして、自分を殺しにかかる魔族を自分の手で止めるために、父親が最後まで抗うために手元にあった銃で魔族を撃つ。魔族に当たった弾は額に傷を残すだけだったが、その傷を目印にその魔族を探しだし、絶対に殺すという復讐を誓った。

あの日、あたしの世界は崩壊した——。紅く燃えて行く民家、倒壊する研究所、惨殺される村人に……両親。これを引き起こした犯人は、魔族だった。両親を殺した魔族は父の生き血を啜り、脳髓をかきむしり頬張る。抉られた脳みそは液状になって地面の中に落ちる……。それが、あたしの脳裏に離れられず残る。何故、両親が殺されたのか？ その答えは分かっている、知っていて……でも、納得は出来ない。  
 何で、偉大な研究者であった父が、献身的に父を支えてきた優しい母が……殺されなきゃいけないのか。魔導の研究がこれ以上進む事が問題だったんだと、そう思う。失われた金属から作られた魔導銃を一挺だけ作り上げて……。  
 魔族はあたしも、その爪で、血に染まったその爪で、その牙であたしを殺そうとした。目の前にあったのは、父と母がそれぞれ残してくれた銃。あたしは、自分を護るためか、それともただ憎しみだけだったのか——。

……その引き金を弾いた。覚えているのは、魔族が手傷を負ったこと、その額についていた傷だけ。一次の静寂が訪れ、ただ逃げるために外に出ると……そ

